あふむ小町

是ハ陽成院に仕へしえてまゐる
新大納言行家ふさく梅も宮君
安嶋の花よ心をそのけだのまく
野を機をし移ろへども侍心に
このみしたなしごとに出羽国
小野良実の女にめみし小野小町
のれハなしひな歌うく乃上手

うつし作りしゝゑもしけきの姿こ
なれて関寺をよむ旅よし御召
ありし行張つ(このかみ)是ありまき兄衣
由哥枕下さきは是在遊歌小(のわ)
ば筐て影を下し(盃かし)とめの道者に
(ものゝきはしゝ)美寄也小野小町(め)
系さへと恵きん 三テ一廿イ 男りひ(とわ)

一一一一一一一一一一一一一一二
哉い旅をりまゐさりやゞ志の空
一一一一一二一一一一一一一九一一二
河原四のきばけ又古乃坂まうさ
一一一一一一一一一一一一一八九一三一
一六三一廿七一一一一一一一一一一一一
郷うむ 有ハ鼻葉の花たまし
一一一一一一一一一一一一一一一
男なまとしがゑ蒸薑乃草とゝ
一一一一一一下一一一一一
なるぎりきは憔悴とおはこ詠へ
一一一一一一一一一一一
ばえうへ是名寃乃森のまらし
一一一一一一一一一一一
枝條くなしう家ハおりしむあし

下音
人をまつ乃身我にこゝちがひにて
深ふ法おかる話ハ物狂ひ人に
いかに 上音 さかりも過ぬ衰の
身にうひてゞ面影ま寅藻婆
一九
かく羅さる重をはりしきらしけし
まきし我きらふ歌遊ひのその夢ハ 一八九二
寝さしめ寝ふりさよ我おさめはてゝ

うわふやりきらし様く
口上詞
いつま
三下詞
さんは
こ秋風の吹小町ふさくなのふ
さんはこまちうまえふ見むと秋ハ
くもおゆへ人ゆさくまいりけるに
小町時実歌ハ何事ふてくあう
口上
さてこのあらためいはぬこと但露と
さしあのふ
三下
旅と世のふとは

なりきはだたく関寺に月数を
経るしるし　実て夏寺ハさゞれかよ
邦と我りうしんしく呆居ありぬ
おもし　誘我所也　前まハ牛
馬乃逢路のこて　受米もり休ま
もゝ　後小伏霊験の山さしく
しのなみもなく　我見表露

上

まちだまさは見やさ逢乃がく
ごす雨さきうる風上ちり雲のえ葉ぬのと
みえてホもし誘やだ松風も白ひ
松ふ声もてどうれしりみきよし羅
雲形も条面白き景色の所々ぶ
いふばまじ天見はう見衆志変りしう
をさ美乃一松ハ男のたくひなる

物を東よ向ハ大者都や石山乃
観世音菩薩のなり橋ハ狂人の
ほまれ成義乃ゆゑためし勝る
色し　シテ詞　ゆゑ了教の進しき時ハ
紫の川わ小題しとこ世ゝ面こゝ
おもが老那大便なし荒枝り
はりゐ又教語よ出そもめでたき

詞
気ゑぬ時ハ渡乃要寺よ帰るこ仏
ワキ詞
いかにまちざゝそれもうたき
よ見えへよ女ゟ　シテ詞　五つ孫いりしへ
百家仙洞篠まりりるゝ名玉ゝ時
こうざりとによりへてうこへをも
後しのじゝ花篤積よ出うめん
霜のゝのしまほ百様ふつゝ浮世母

なかゝる山ありのまゝにて候　口平詞 実も

道理なるの第一わ法ありのまゝ申候

法華経を下されては是に見え候

ミテ詞 なかは此法門よりわの一法なり此三蔵

法華経をくたき捨てんとのあやあり

あらありかたや此御経よりも文字も

こゝにたちのみえ　かの法は此かき

小町かうはさし捨てん　さらくさへ

御心へ　ミテ いのちも大りしかはま

やうハきの持ゆへ　早 露ふかうへの

ミテ 雲は上ゑ　早上 雲の上はありし昔に

下 翻りし其の花の身の内や床

ー さき　ミテ詞 飽面白の法華経や候よ

やな吉さに游きたまふて水よりたを

たく寸悦はちと歌を母遊しける
詞
思ひ於らずヾ申さぬ時ハなきう於
あやが藤陰を遊哥を作ハ一字にて
ワキ詞
申さるう　不思議座敷う於哥ハ
三十一字を以らるゝ心の
上カル
しらぬ歌もさらに一字乃遊哥にこ
申るゝ見もも狂氣の極へやうせし

シテ詞
いやうとな文字らうを遊哥なき
ワキ詞
いうとい文字とはいかに
シテ
さらは春の御哥を作いききせ
ワキ
折ふ遊し　不審なりともさらば
上カル
あり家雲みうへ遊著に
下
語らはとかし取るの所のやうや
シテ詞
遊ひき　さきたらう字ちゃや

遊しきなひ歌乃巻てうちらへ
ゆしかとよむ時々小町か讀
う面在遊哥なりわ　採いりしも
めし歎ためし衣の(?)やうせ
なみあふ姿か面しりみ子を
この哥流さ下在中なる(?)門の
浪歌を上げひ参りきそら奇時八

天の色もいう闇うすし和哥乃さ
なうい神も由ふしすり
下拗ださいうし(?)位よ
まりふとこめきとい作和哥の
他とうやく　本野乃さ下域
是ぬ歎よ名哥短哥旋頭歌折句
誹諧混本歌仍つむへの　心

廻文哥なるをへなりむかしく鄭重

かゑしかゝる事ども読しに

一條院あやわ尾ぬをあふむと

いゑるこゞ人の云言葉をまねてかゞ

をすめさそへはわとくはなりこ

はへぬるとはいる花咲かせの色

儀しく小哥の色香もゆくへ

しらくなる道は鄭重のゑしはぬ

ミ

中むかし実や歌の道をまめ語るに

絵巻のみをしへ おなをを思ハばゝ

たりなくきよぎ歌はいつのさ迷

世ゝ乃集めたる哥人の名おかれく

御依中小野小町のたくひと聞ゆる

筆のあとのこゑたちを下せく

さう聞ふかく悦よのく叡覧と
こう家〻の云傳もまこと置
好人集 上 和歌の六義を兼し
その哉小町が影をうつしだく〳〵しと
哥の大めしにひなゝの名を五行
那のしゞ数人蒙ゝ塊も世あり
はうまぞよて家殊葉と偽く〳〵け

桃花あめ哉おひ姫姿のきあり
たをやなかの上紫等あ哉家ゝ身
同ゝ重探花ハ必のみ成しの地
ぢゝ悠悴とおちふまて心庭出味
ひる小町そありけなやわ
口上詞
いのり小小町業平遍昭よみし歌
清樂の藻なせものかひくへ
ヒ上詞
梅も

葉は玉津志まにいわひ心
光こえしのはずみ飛も衣あしを
象ゝ花とかへやこそ花もこ栞花
こめし錦為山ゞ萬葉の里もすゝ
下同
聴めぐく和哥の上にさしの乗
玉津島小柴みちくしゞ葉栗の
葉乃袖思ひ廻らしのふに

中
とゝきさのわきぬまゞ犬路乃
りの大あとゝわがおもわ
忍しめさ和光の
ひのもと玉津島兎くゝす袖や
なゝひの和歌の浦よ塩満
くまゝはざのこか潟なみあしへを
さして田鶴なく渡る晴天

大原ぬ露よしなや志のひ衣
小原の露もりし庵乃ねの
月ふ床めて こゝ秋ふこゝの
床も秋ハ人最 老こなる物を
引あかとにゆやさめしわ露の巻乃
昨人なまうこぬだりひとはまつ
波の あら重しのますや風

ゆふ夕しさ此月もら秋りあし小
ざらしはいざいひて行衛のやこに
ゆの人の一巻秋え こまちもとも宿
見もの名なわとも 杖よしあかて
よわく悦ぶきつまう秋り袖乃
涙ぶつし行袖の涙も関守露
案乃庵ふいりへゆのこりらわ